

本部企画：国際シンポジウム

武道の捉え方—世界の動向—

Trends in global perceptions of Budo

パネリスト 百鬼 史訓（日本武道学会会長）

金 正幸（大韓武道学会会長）

W. J. シナルスキー（President, International Martial Arts and Combat Sports Scientific Society, Poland）

司 会 大保木 輝雄（埼玉大学）

アレキサンダー・ベネット（関西大学）

日 時：平成 24 年 9 月 6 日（木）14：40～17：40

会 場：講義棟 2 階 0026

開催趣旨

本学会は今年で創立 45 周年を迎えます。今回、記念すべき第 45 回大会を開催するに当たり、武道の未来に欠くことのできない国際化をめぐる諸問題の検証とさらなる考察の深化を目的に、本大会から来年度の第 46 回大会までを「国際学会開催記念事業期間」と位置付け、委員長会議が実行委員会となり、実施計画を策定してまいりました。

記念事業の端緒として、本大会では海外における武道研究学会の代表としてポーランドと韓国の代表を招聘し、本部企画国際シンポジウムを開催致します。

顧みれば、当学会に於ける国際シンポジウムは、5 年前創立 40 周年記念大会時、特別企画としてフランス、ベルギーから柔道、剣道の研究者を招き、「武道の国際化に関する諸問題」と題するテーマで実施致しました。併せて通例の本部企画として、「武道の国際化—その光と影—」と題するシンポジウムも実施し、柔道・剣道・相撲・空手・弓道・なぎなたの各専門分科会より選出された演者による基調講演、並びに活発な討論を行いました。

その後、第 41 回、42 回大会では、2012 年実施の中学校武道必修化をめぐって、文部科学省より招いた講師の講演、及び各専門分科会より選出された演者による報告等を行いました。ここでは、「我が国固有の文化に触れる為の指導」として「教材としての武道」を如何に提示出来るかが、討論の中心を占めたように思います。

続いて第 43 回、44 回大会と 2 回に亘り、武道への期待や武道の固有性をめぐる議論をも視野にいたした「武道の国際的普及」に関するシンポジウムを開催し、運動学、スポーツ人類学、社会学、日本文化学等の学的立場から問題点の指摘と提案がなされ、改めて武道の特性について認識を深めることが出来ました。

特に昨年第 44 回大会では、国際交流がより盛んになって来た現代、武道の固有性というよりは、むしろ武道の普遍性こそ重要な課題なのではないか、という新たな視点が提示されたことは収穫だったと受け止めています。

以上のように、それぞれの大会で浮き彫りにされてきた武道の国際化をめぐる諸問題を射程に入れ、今回は、演者として大韓武道学会会長である金正幸龍仁大学総長（韓国）、International Martial Arts and Combat Sports Scientific Society 会長である W. J. シナルスキー博士（ポーランド）を招聘し、日本武道学会会長である百鬼史訓先生にも加わって戴き、「武道の捉え方—世界の動向—」というテーマでの鼎談を実施致します。

武道という我が国発祥の固有の文化が、国際化時代の今日、実際、海外ではどのように捉えられているのか。武道の普遍性、及び今後の武道研究に対して、新たな切り口やヒントの見出されることを心から期待したいと思います。

（日本武道学会 企画委員長 大保木 輝雄）

世界における武道の捉え方

百鬼史訓（東京農工大学）

本日、東京農工大学において日本武道学会創立 45 周年記念大会の記念事業として、International Martial Arts and Combat Sports Scientific Society (IMACSSS) 会長 Wojciech J. Cynarski 氏（ポーランド・Rzeszow 大学教授）と大韓武道学会会長金正幸氏（龍仁大学総長）をご招待し、「武道の捉え方—世界の動向—」と題してシンポジウムを開催することになりました。2008 年、私は、日本武道学会会長に就任して以来、武道の国際化についての諸問題について取り組み、シンポジウム等を開催して様々な視点で議論を重ねてきました。その流れのなかで本学会の記念事業としてこのような国際的シンポジウムが開催されるに至りましたことを、大変喜ばしく思っております。関係各位の諸先生方に深く感謝申し上げます。

さて、本日私が採り上げたい問題は「武道」という言葉についてです。武道を海外に紹介する場合には翻訳が必要となりますが、英訳する場合は武道という言葉は一般的に *Martial arts* と訳されています。

しかし、私は、2 年前にポーランドで開催された IMACSSS の世界会議に参加した折に、初歩的・基本的な疑問を持ちました。第一は、*Martial arts* と *Combat sports* と分けて使用しているが、その差異は何なのか、明確な区分がなされているのかという疑問でした。第二として、*Archives of Budo* という学術的雑誌がありヨーロッパのみならず世界的にも読まれているとのことですが、*Budo* と *Martial arts* という言葉が併用されていることでした。学会として、明確に区別がなされているのかという素朴な疑問でした。また、今年（2012 年 9 月）に、イタリア Genoa で行われた 1st IMACSSS 国際会議のテーマは、*Game, Drama, Ritual in Martial Arts and Combat Sports* でしたが、*Martial arts* の概念は、宗教的・伝統的・民族的・舞踊的な内容までも包含しようとしていると感じました。つまり、次第に *Martial arts* の概念が多義的に変容しているように思えるのです。

例えば、日本武道館武道憲章には、「武道は、日本古来の尚武の精神に由来し、長い歴史と社会の変遷を経て、術から道に発展した伝統文化である。・・・」とありますが、英文では「*Budo, the Japanese martial ways, have their origins in the age-old martial spirit of Japan. Through centuries of historical and social change, these forms of traditional culture evolved from combat techniques (jutsu) into ways of self-development (do).・・・*」と翻訳されています。*Budo* という固有名詞を使用した上で、*the Japanese martial ways* と説明書的に英訳しています。以前は、*Martial arts* と表記しておりました。いわゆる *Budo* の意味内容のニュアンスが異なってきている、もしくは *Budo* の意味内容が *Martial arts* では言い表せないとの認識があったのではないかと推察しています。それは、武道が人間形成を目的とした教育手段として考えられてきたことに由来しているからかもしれません。

電子辞書に掲載されている英英 Oxford 辞書の 2004 年版には *Budo* という単語が掲載され

るようになりましたが、それ以前は掲載されていませんでした。今日、*Budo* が世界的に認知されてきたということですから喜ばしい限りです。であれば、あえて武道を *Martial arts* と英訳する必要はなく、今日的に武道と *Martial arts* の差異化を図り、世界的には、武道は *Budo* として定着していくことが望ましいと考えております。

本日、この国際シンポジウムにおいて、両氏からヨーロッパや韓国において *Budo* と *Martial arts* そして *Combat sports* との差異についての意見を拝聴することは、武道の国際化を図る上で、有益な示唆が得られるものと期待しております。

Global perceptions of Budo

On behalf of the Japanese Academy of *Budo*, I would like to welcome the President of the International Martial Arts and Combat Sports Scientific Society (IMACSSS), Professor Dr. Wojciech J. Cynarski from the University of Rzeszow in Poland, and the President of the Korean Alliance of Martial Arts, Dr. Jung Haeng Kim, President of Yongin University in Korea to the Tokyo University of Agriculture and Technology as speakers at today's symposium, entitled "Trends in global perceptions of *Budo*." This year marks the 45th anniversary of the founding of the Japanese Academy of *Budo*. Since becoming President in 2008, I have been involved in symposiums and other meetings regarding the internationalization of *Budo* and I am therefore extremely pleased that an international symposium such as this has been achieved. I offer my sincere appreciation to all involved in holding this event.

Therefore it is on the topic of the term "*Budō*" that I would like to talk about today. Introducing *Budo* overseas requires the translation of Japanese texts, and the term "*Budō*" is often translated as "Martial arts".

However, fundamental questions regarding terminology or clarification were raised at the IMACSSS World Conference held in Poland in 2010 which I attended. First, although "Martial arts" and "Combat sports" are used as distinct terms, what is the difference between them and can they be clearly classified? Second, the scientific journal "Archives of *Budo*," which has a global readership, uses both "*Budo*" and "Martial arts". Does the IMACSSS make a clear distinction between the two terms?

Furthermore, the theme of the 1st IMACSSS International Scientific Conference held in Genoa, Italy in September 2012 was "Game, Drama and Ritual in Martial Arts and Combat Sports"; however, the concept of Martial arts appeared to cover spiritual, traditional, ethnic and dance-like content. In other words, the concept of Martial arts has gradually evolved to encompass many meanings. For example, the Nippon Budokan Budo Charter is translated as follows. "*Budo*, the Japanese martial ways, have their origins in the age-old martial spirit of Japan. Through centuries of historical and social change, these forms of traditional culture evolved from combat techniques (*jutsu*) into ways of self-development (*do*)." The phrase "the Japanese

martial ways” is added for explanation after the proper noun “*Budo*,” which was previously expressed as “the Japanese martial arts”. This suggests that either the nuance of the semantic content of “*Budo*” has changed, or that it is now recognized that the semantic content of “*Budo*” is not accurately expressed by “Martial arts.” It has been considered then that Martial Arts derived from the term *Budo* are more closely related to human development and education.

From my own experience, while the term “*Budo*” was first entered into the English-English Oxford Dictionary, electronic dictionary edition in 2004, and it was not included in any prior editions. The international recognition given to *Budo* today is of great satisfaction to me. As a result, there appears to be no need to translate *Budo* as “Martial arts” and we should attempt to clarify the distinction between contemporary *Budo* and Martial arts and establish global usage of the term “*Budo*.” During today’s symposium, I look forward to hearing the opinions of both guest speakers regarding the differences between *Budo*, Martial arts and Combat sports in Europe and South Korea, and to obtaining some instructive suggestions regarding how to achieve the further internationalization of *Budo*.

氏名：百鬼史訓

現職：東京農工大学理事・副学長（広報・国際担当）

学歴：東京教育大学体育学部卒業（1971）、同大学大学院体育学研究科修了（1974）

職歴：筑波大学体育科学系文部技官（1974）、同助手（1979）

東京農工大学工学部講師（1979）、同大学助教授（1980）、同大学教授（1993）、

同大学理事・副学長（2011—現在に至る）

専門領域：スポーツ科学（剣道、バイオメカニクス、運動生理学、スポーツ工学）

主な論文・著書等：

1. “Influence of Datotsu in Kendo on the Human Head: Impact Estimation Using Simulation with Crash Dummy”
Fuminori Nakiri, Naoya Yokoyama, Yuji Arita, Tetsuya Kubo, Shin-ichi Yamagami, -Research Journal of Budo (2005.Mar)他。
 2. 剣道和英辞典（共著）、全日本剣道連盟、2011
 3. 剣道指導要領（共著）、全日本剣道連盟、2000. 他多数。
- 学会活動：日本武道学会会長
競技役員等：全日本剣道連盟医・科学委員会委員、同社会体育指導員委員会委員
剣道教士7段

韓国武道の展望

Korean Martial Arts Prospects

金 正幸 (龍仁大学)

1 現代の韓国武道

現在テコンドーは韓国の武道で始めて今は世界的にその価値と優秀性を認められている。1946年から各道場で指導を始めたテコンドーは1965年に大韓テコン道協会が誕生して、1973年に世界テコンドー連盟が創立されて現在まで急速に発展を成したがその背景には龍仁大学校があった。

1953年大韓柔道大学で出発した龍仁大学校は1976年格技学科にシルム、剣道、テコンドーなど5個専攻を新設したし、1982年にはテコンドー学科を初めて開設して幾多の武道指導者たちを排出している。

テコンドーが統合を通じて1980年代から飛躍的な発展を重ねて世界的な武道になった一方、合気道(Hapkido)の場合は何回の統合試図にもかかわらず失敗しつ約50余個の中小団体が派生された。カンフーの場合も李小龍(ブルース・リー)の影響などで1980年代初盤まで多くの道場があったが今は大部分大人を対象で大極拳修練をする道場になってウシュ(Wushu)と一緒に総合武術を指導する道場は非常に珍しくなった。

1990年代には武道に伝統性が一番話題になった。いくつかの武道が伝統性論難に包まれたり客観的な根拠がない武術たちも2千年以上の歴史を論じたりして実際法的争いが起きたりした。砂時計と言うドラマで剣道が大きい人気を呼ぶことになって伝統武技だと主張した海東剣道がテコンドーについて多くの道場を保有したりしたが内紛によって50個以上の団体に分裂されて勢力が弱体化されている。この中でテッキョンがユネスコ文化遺産に登録されたし、'武藝圖譜通志'に記述された馬上武芸を含んだ24種の武道を復元してこれを伝授及び継承する団体もある。

2000年に入っては異種格闘技が高い人気を取って武道の価値を変化させる恐れがある。過度な商業化、青少年たちの暴力性模倣など逆機能に対する対策と武道スポーツ活動に対する関心など順機能を拡大して純粋武道への誘引できる方案が樹立されるべきだ。

現在エリート選手を中心に支援する大韓体育会には剣道、空手道、弓道、シルム、ウシュクングプ、柔道、テコンドー、テッキョン団体が加盟されていて、生活体育を主導する国民生活体育会には弓道、テッキョン、合気道、国武道、剣道、テコンドー、国学気功、シルム、ウシュ、総合武術、特攻武術、伝統仙術、異種格闘技、空手道団体が加盟されている。テコンドーとともに伝統武道で認められるテッキョン、シルム、弓道と新しい武道の中心になっている龍武道に対して紹介しようとする。

①跆拳道(テコンドー)

テコンドーが今のように世界化された姿を持つようになった多くの理由の中で代表的な3つは競技化と競技規則の変遷、そして海外の普及と言える。

テコンドーの哲学的思想は空に力を寄り掛かる天神崇拜思想に韓民族は空を仕える事を重要視したし、これをもとに仙思想が民族の哲学的思想が土台になって仏教と儒教的思想が影響を受けた。

2000年シドニーオリンピックからオリンピック正式種目に採択された。2016年リオデジャネイロオリンピック大会でもテコンドーが正式種目に残留されたということは全世界がテコンドーの優秀性を認識したのだ。テコ

ンドーは 2012 年現在 202 ヶ国の加盟国家を持った巨大な世界的なスポーツで位置付けているし、オリンピック正式種目として世界各国に指導者を派遣して世界各地で宗主国を体験するために多いテコンドー人たちが韓国を訪問している。現在小学校から大学に至るまで多くの学校でテコンドーを修練しているし、学校体育とともに道場体育で非常に発展している。大学で学科に運営されているし、最近には龍仁大学校にテコンドー大学院課程も開設されて実技技術だけではなく学問的理論研究も活発に成り立っていてテコンドー人才を育成及び海外派遣が活性化になっている。また 2005 年大韓障害者テコンドー協会が創立されて 2011 年第 2 回世界障害者テコンドー選手権大会がロシアで開けて障害者もテコンドーを修練して身体的・精神的に肯定的な効果を非障害者たちと共有できるようになった。

② テッキョン

テッキョンは 1983 年韓国の無形文化財に指定された以後、2007 年には大韓体育会に正加盟団体で認められて 2011 年には網渡り、ハンサンモンシチャギとともにユネスコ無形文化遺産に登録された。1980 年代に入って体育文化が拡散して我物の大事さを悟らせる伝統文化運動が起きて大学生たちを中心に伝統武芸を修練しようとする人々が増えた。1983 年無形文化として財指定されてテッキョンの身振りは私たちの物だという認識と共に小学校・中学校はもちろん大学体育時間や課外活動で、また大人たちにも生活体育や文化活動として心身鍛錬の手段に活用されている。

③ シルム

1946 年大韓シルム協会が創立されて 1947 年から ' 全国シルム選手権大会 ' と 1964 年に創立された ' 大統領旗全国壮士シルム大会 ' が現在まで持続している。

1983 年 4 月 16 日からプロ競技である ' 天下壮士シルム ' が始まってシルムが人気があるスポーツになって多いプロチームが創団されたが 1997 年 IMF 外換危機にあつて次々チーム解体で徐々に衰落の道を歩くようになる。

大学シルム連盟の努力は大学シルムスターの誕生とファンクラブ誕生など肯定的な効果を収めているし、スポーツ専門 TV 中継放送の視聴率も他のスポーツのような水準でシルムの発展可能性を確認させてくれる。

大韓シルム協会も ' シルム懸案解決特別委員会 ' を設けて競技技術分科、教育研修分科、段證制度分科、交流協力分科、政策行政分科、広報及び学術分科で分けてシルムの百年大計のために新しい滑路を模索している。また、シルムの歴史記録、広報のために 2009 年 8 月季刊誌である " シルムト " 創刊号を発行した。

④ 弓道

弓道は韓国の伝統武技として心身鍛錬及び精神修養の方便にしたし、有事時国家を防衛する最大の原動力になった。当時は弓の使用と発達をはかってその種類も多様だったが惜しくも現在まで伝来されたことはただ角弓だけだ。このように伝統武芸である弓道は伝統武芸と同時に精神文化として 5 千年を超える長い歴史を持っている誇らしい伝統スポーツだ。

1983 年洋弓分野を大韓洋弓協会で分離して大韓弓道協会では伝統スポーツである弓道だけ専担している。

⑤ 龍武道

龍武道は融合と調和を志向する韓国思想の理念と龍仁大学校の建学理念を武道・スポーツ教育を通じて具現し

ようとすることで柔道、テコンドー、剣道、合気道、シルムなど武道と護身術を統合させた韓国的総合武道体系として、龍武道を通じて龍仁大学の建学理念を鼓吹させて韓国の民族精神を世界に広げている。

龍武道は古代から伝わる武術、武芸を含んだ武道の特性と韓国文化の思想的、哲学的背景と現代スポーツ科学を通じる武道の科学化を集大成したのだ。したがって龍武道は武道の思想的背景とともに現代スポーツの教育的な側面を見た身体的、心理的、社会的、余暇・創意的、道義的そして安全学的価値を追い求めて、ひいては実用的な価値を含んで通典的人間観と世界観を土台に定立された。

2012年現在龍武道は10万名くらいの有段者と50万名くらいの修練者がいるし、海外修練館を含んで約1,000余個の加盟道場がある。地域協会別に昇段審査と修練会そして各種自体教育はもちろん地方大会と全国大会そして世界龍武道大会がある。

2009年には大韓体育会から認められる団体になったし、10余年の短い期間にもかかわらずアメリカ、スペインなど24ヶ国で修練中であるし、特にインドネシアでは陸軍の武術に採択された。

2 韓国武道の未来

1) 武道修練人口の減少

人口の減少は武道修練人口の減少と直結される。今までテコンドーを含める武道修練の肯定的な効果と心と精神の修練より身体修練に集中した結果、学令期青少年たちが武道を修練することになって武道修練年令層が低くなって修練人口が急激に増えたが、これからは反対に生まれ人口が減少して武道修練人口の減少につながっている。着実に増加している高齢層及び大人を対象で修練プログラム開発を通じて武道修練を誘導するなど修練年令層を多様化する必要がある。

2) 武道のスポーツ化

私たちは武道はスポーツと一緒に身体を鍛える機能もあってそれに加えて精神を修練することで肯定的な効果を得ることができてスポーツより武道を修練しなければならないと言う。またスポーツは過程より結果中心的で、多数のための生活体育のスポーツよりは少数のためのエリート中心のスポーツ化になっているし、商業主義に染みっていて徐々に武道の時代になるはずだという主張もある。こんなにスポーツ化の差別化を主張する多い武道がスポーツ化になっている状況だが身体的修練とともに精神的な修練を強化して武道の機能を回復できるのを期待して見る。

3) 武道修練生活環境の変化

最近複雑な現代社会で禁食、ヨガなど多様なプログラムとともにしている瞑想を通じて自分を探して霊的な自覚や身体の平定を高めようとする人々が増加している。銃器の普及による危機を心身修練と教育でもっと発達するようになった武道の歴史的意味をよく見て、中国の太極拳がエリート選手たちによる競技や護身の意味より身と心の健康のための、すなわち養生で中国全域に広がってアメリカでも非常に人気がある武道になったことを考慮して見れば、これからの武道のためには自然と一緒に身体はもちろん心を修練できるプログラム開発などの多様な努力が必要だ。

4) 教育に対する関心

現在武道を修練する人々は青少年が大多数を占めている。ある研究によると学校授業以外に実施する課外科目(重複回答)は英語(46.8%)、数学(38.8%)、ピアノ(37.8%)、美術(14.3%)でありその次が武道修練で12%にも及ばなかった。それさえも約80%が2年内に武道修練を中断する。その最大の理由は学業のためだと言う。成績主義評価、高学歴追求、既成世代による画一的な教育制度などですべてのものがそっくりそのまま青少年に被害を与えて武道修練を妨害する要因になるのだ。一方韓国にある国際的な英才を養成しようとする国際・高等学校や名門高等学校ではテコンドーを含める武道1ヶ種目を3年の間修練しなければならないことはもちろん一歩進んで体系的で国際化されたシステムに差別化された体育教育を実施して未来のリーダーを養成することをその目的にして微妙な対照を成している。特に最近学校暴力が深刻な社会問題になっている。これに対する方案にすべての学校で礼で始めて礼で終わる武道修練で学生各自の護身はもちろん精神修練を通じて相手を気配りして尊重する心を持てるようになってほしい。

今まで韓国武道の現在と展望に対して手短かに考察してみた。

概して短い期間に現代武道は急速な成長をしたしその成果は世界化になったと言える。しかしこのような眩しい発展にもかかわらず裏面にはスポーツが持っている病弊をそのまま踏襲している現実がもっと成長できる武道を妨害していることが切なくて韓国武道の否定的な側面を言及した。これは身と心、そして精神を同時に修練する武道の本質に帰って来る時すべての問題が解決されるはずだという信頼を結言でしようとする。

プロフィール

氏名：金正幸

現職：大韓武道学会会長(1995—現在に至る)、東アジア柔道連盟会長(2003—現在に至る)、アジア体育交流連盟理事長(2004—現在に至る)2003、大韓体育会副会長(2005—現在に至る)、汎太平洋柔道連盟会長(2005—現在に至る)、アジア柔道連盟(IJF)副会長(2007—現在に至る)、2018平昌冬季オリンピック誘致委員会委員(2009—現在に至る)、2014仁川アジア競技大会組織委員会副委員長(2009—現在に至る)、2015光州夏季ユニバーシアード大会組織委員(2010—現在に至る)、国際柔道連盟(IJF)オリンピック・ソリタリティ委員会委員(2010—現在に至る)、龍仁大学第6代総長(2010—現在に至る)

学歴：大韓柔道学校(現・龍仁大学)柔道学科卒業(1961)、建国大学行政大学院教育行政学科卒業(1976)、日本大学理学博士学位取得(1997)

職歴：バンコクアジア競技大会韓国選手団団長(1998)、世界柔道連盟(IJF)副会長(2006—2007)、北京オリンピック韓国選手団団長(2008)

受賞：大韓民国体育勳章白馬賞受賞(1992)、大韓民国体育勳章青龍賞受賞(1998)、国際柔道連盟に貢献した功績により、IJF 銀メダル受賞(2002)、IOC 勳章銀賞受賞(2003)、モンゴル建国800周年記念功労勳章受章(2006)、国際柔道連盟に貢献した功績により、IJF 金メダル受賞(2008)、スペインオリンピック委員会特別功労賞受賞(2010)

Budo, Martial Arts and Combat Sports – Definitions, Ideas, Theories

Wojciech J. Cynarski
(University of Rzeszów, Poland)

Keywords: martial arts, western conceptions, humanistic theory

Abstract

In the introduction of Budo, martial arts and combat sports on a global scale into Euro-Atlantic culture, we see overlapping patterns in areas such as dictionary definitions, popular literature, mass culture and concepts of science. Here the author attempts to clarify these various concepts. While the focus of cultural anthropology is on the analysis of artifacts and behavior, the **humanistic theory of martial arts** views the martial arts and those who practice them more holistically. The author's own research looks at the response to the psychophysical martial arts (especially Budo) of those who practice them in Central Europe [Cynarski 2006], with particular reference to their connection to styles of life (moral dimensions and daily training), the internalization of values, and self-realizing aspirations and spiritual dimensions. It is noted that instructors often adopt the philosophy of self-perfection by cultivating the way of martial arts as their own philosophy of life.

The martial arts are studied here as a socio-cultural phenomenon, and the secondary effects of their practice are discussed (not just their utilitarian value, but also their cultural influence). The focus is on people interested in practicing the martial arts whatever their country, language, history or culture and the connections made to all the countries where the martial arts originated [Saldern 1998; Cynarski 2000].

The Western reception of the martial arts and martial pathways (Budo) can be seen as the sum of the scientific and popular responses as a socio-cultural phenomenon. Only the humanistic theory of martial arts - as opposed to reductionist approaches - takes into account the physical, psychological and cultural characteristics of this type of practice [Cynarski 2009].

References

Cynarski W.J. (2000), *Martial Arts Budo in Western Culture* (in Polish), WSP, Rzeszow.

Cynarski W.J. (2006), *Reception and Internalization of the Ethos of Martial Arts by Exercisers* (in Polish), University of Rzeszow, Rzeszow.

Cynarski W.J. (2009), *Towards a general theory of self-defence (in English), "Ido Movement for Culture"*, vol. 9, pp. 240-245.

Saldern M. von [ed.] (1998), *Budō in heutiger Zeit* (in German), Universität Lüneburg, Lüneburg.

武道、マーシャルアーツ、コンバットスポーツ—その定義、概念、理論

keywords : マーシャルアーツ、西洋の概念、人本主義的理論

武道、マーシャルアーツ、コンバットスポーツを欧州太平洋文化域のスケールで紹介する時、辞書内の定義、大衆文学・文化や科学的概念の分野で重複したパターンが見られるが、著者はこのような様々な概念を明らかにすることを試みた。

文化人類学の焦点が文化遺物や行動の分析であるのに対し、マーシャルアーツを人本主義的理論で見ると、マーシャルアーツとその実践者をより総体的に捉えることができる。著者自身の研究は、中央ヨーロッパでマーシャルアーツ（特に武道）を実践する人々の精

神物理学な面に焦点を当ててきているが、これは、彼らのライフスタイル（道徳観や日常のトレーニング）、価値の内化、そして自己実現願望と精神の重要性と密接に関連していることから来ている。特に、指導者がマーシャルアーツの道を修養することによって自己完成することを自分自身の人生哲学としていることは興味深い。

ここではマーシャル・アーツは社会文化的な現象として研究されている。そして稽古の二次的影響が議論される（実用的な価値だけでなく文化的な影響も含めた）。焦点は、国、言語、歴史や文化の違いに関係なくマーシャルアーツを修練する人々であり、またマーシャルアーツ発祥全ての国の関連性である。

西洋のマーシャルアーツと武道の受け入れ方は、社会文化的現象としての科学的かつ大衆的反応の結果であると見ることができる。マーシャルアーツの以人为本主義的理論のみが、一還元主義的な見方に反対するものとして一このタイプの練習の身体的、心理的かつ文化的特性を考慮している。

(日本語訳：豊嶋建広 浜崎鈴子)

Wojciech J. Cynarski

Faculty of Physical Education, University of Rzeszow, Rzeszów, Poland

Prof. Wojciech J. Cynarski, Ph.D.

University of Rzeszów, Faculty of Physical Education

Towarnickiego str. 3, PL - 35-959 Rzeszów, Poland

Education and previous work experience

Education – University of Technology in Rzeszów (building engineering), University of Rzeszów in Rzeszów (sociology), and doctoral studies at University of Physical Education in Warsaw (physical culture sciences).

1987–1998 instructor of martial arts and teacher of physical education in secondary schools.

Since 1998 an adjunct in the Institute of Health and Physical Education, Higher Pedagogical School in Rzeszów. Since 2005 - Professor at the University of Rzeszów, Head of the Chair of Humanistic Sciences in the Faculty of Physical Education.

He is a President of the International Martial Arts and Combat Sports Scientific Society (IMACSSS) and of the Idōkan Poland Association (IPA).

First-line publications

He has published over 500 scientific works, including 10 books (monographs and manuals) as sole author. His major scientific interests are in sociology (of culture, tourism and sport), philosophy and pedagogy, and martial arts.